

ハレの日における空間演出に関する調査 — 祇園祭での演出実態と若者の意識から文化継承を考える —

芝本 早織

延原 理恵

(京都教育大学大学院連合教職実践研究科)

(京都教育大学)

Decorating a House for the Day of “Hare”: A Consideration of the Gion Festival’s Cultural Legacy and an Awareness Survey of the University Students

Saori SHIBAMOTO

Rie NOBUHARA

2011年11月30日受理

抄録：日本には古くからハレ（非日常）の場では衣食住や振る舞い、言葉遣いをケ（日常）とは区別する習慣が存在する。しかし、今日ではハレとケの区別が薄れてきたと言われている。このような風潮を受けて、本研究では、学校がこの概念を次世代に継承する機能を果たすのかを2つの調査より検討した。ひとつは祇園祭における空間演出の観察調査である。2010年に開催された祇園祭での空間演出の方法を調べると、現代技術を生かし、伝統的な演出方法を再現していることがわかった。もうひとつは京都教育大学学生を対象にしたハレの空間演出に関する意識調査である。家庭や学校園でハレの空間演出に関する経験が多い人ほどハレの空間演出に関心が高く、積極的な姿勢である傾向がみられた。以上の結果から、現代的技術と人々の努力により伝統的なハレの空間演出が今も生き続けており、それらを後世に伝える場として学校を利用することは有効であることが明らかとなった。

キーワード：ハレの空間演出，祇園祭，季節の行事

I. はじめに

日本には「ハレ（晴れ）」と「ケ（曇）」という伝統的な概念が存在している。ハレとは年中行事や儀礼、主人の接客など特別な出来事のこと、ケとはその反対に日常のことを示す。ハレとケの概念は古来より続く日本独特の文化であり、江戸時代に長崎へ来日していたオランダ商館員の記録に、ハレの日には住空間が一変する様子の記述¹⁾が残されている。しかし、この代々受け継がれてきた伝統文化であるハレとケの区別は薄れてきていると言われている。かつては家庭で伝承されていたと考えられるこの概念も、職住分離や核家族化が進んだことにより現代では更に伝統継承が困難になっていると考えられる。

このような状況下で家庭以外での伝承の場を考えたとき、学校が挙げられるのではないだろうか。家庭科教育では「特別な日の服装」や「行事食」が取り上げられている。しかし、現段階では住居領域において特別な日の住まいについてはあまり取り上げられていない。また、新学習指導要領では伝統や文化に関する教育の充実が図られている。これを受けて、学校が家庭や地域と連携しながら、その地域に昔から存在するハレの空間演出を次世代へ伝えていくことが期待される。本稿では祇園祭を対象とした観察調査と本学学生を対象としたアンケートによる意識調査の結果から、学校が伝統継承の場として機能するのかについて考察する。

II. 祇園祭を対象とした空間演出の観察調査

1. 調査の背景

祇園祭での空間演出として挙げられる代表的なものが会所飾りである。会所飾りとは各町内にある町会所を御神体やタペストリーなどの懸装品で装飾することだ。この会所飾りについては既にたくさんの研究がされており、

それらの研究は大きく分けて二つの視点から行われていることが分かった。一つは歴史的な変遷であり、もう一つは建築形態による演出方法である。

前者では洛中洛外図屏風や多くの祭礼図を基に平安から江戸時代、更には現代にいたるまでハレの空間演出がどのように発達してきたのかを調査²⁾している。この調査では以下のことが明らかにされている。ハレの演出はもともと平安時代に権力者が権力を誇示するために造っていた棧敷を起源とし、そこから庶民へと拡大した。それと同時に道に出されていた飾りが徐々に家の中の装飾へと移り変わり、江戸時代後期にはその集合体として町全体で飾り付けを行うに至った。こうして「会所飾り」として登場したのである。後者では空間演出の場となる町家（町会所）を調査し、建築形態と飾り方から演出方法を分類している。その分類とは、通りからお飾り場が見えない奥棟型、何らかの理由により町会所がなく、臨時のお飾り場を使用する会所なし、通りにお飾り場が面している表棟型の3種類である。そして表棟型は更に細かく鉾・曳山型、かけ山型、ビル型に分類されている。

両者共に共通するのは過去の流れを踏まえて現在の実態を明らかにする研究という点である。しかし、既存の研究では文化の継承方法についての具体的な考察は行われていない。このような背景から、まず文化の継承方法を考察するために、伝統的なハレの空間演出が現代ではどのように行われているのかを調査し、文化継承の実態を検証することにした。

2. 調査方法

(1) 調査時期および方法

山鉾建てが行われる2010年7月11日（日）から山鉾巡行が行われる7月16日（金）を調査期間とし、写真やボイスレコーダーによりハレの空間演出を記録する観察調査を行った。調査場所は四条烏丸を中心とした祇園祭実施地区である。調査対象となる町会所は谷の研究報告³⁾による演出方法の分類をもとに各分類から1町内ずつ選出することにした。すなわち会所のない菊水鉾町（菊水鉾）、ビル型の函谷鉾町（函谷鉾）、表棟型の小結棚町（放下鉾）、奥棟型の笋町（孟宗山）の計4町会所を対象とした。各町内を選んだ基準は現在に至るまでの歴史について詳しい記述が残っているものとした。また、山鉾町の飾り付けの様子に加えて、四条繁栄会商店街、寺町商店街、新京極商店街、錦市場、河原町商店街での装飾の様子も同じ期間内に調査した。

(2) 調査内容

町会所での調査項目は町名、所在地、会所飾りの分類、建築構造、お飾り場の位置、山鉾の種類、外観の7点である。外観は外から中の飾りが見えるか否か、外も飾り付けられているか、音楽が流れているか等を観察した。観察した様子を記録用紙に記述し、またポイントごとに写真を撮って記録した。音楽が流れている場所ではボイスレコーダーで録音した。商店街での調査項目は外観（通りから見える場所に飾りをしているか否か、音楽が流れているか）と飾りをしている店舗数である。これについても地図に記入し、飾りの様子を撮影、音楽は録音によって記録した。

3. 調査結果

(1) 山鉾町での会所飾り

調査対象とした4つの町会所と観察結果については表1に示す。

文献調査では町会所がないとされていた菊水鉾町は、2003年に出来たマンション内に新たに町会所が作られていた。マンション2階に造られた一室から、鉾にのぼる橋掛りが設けられ、ビルの合間に鉾が建てられていた（図1）。菊水鉾にのぼる形態がこの橋掛り方式に変わったのは2009年である。このマンションのエントランス照明は和のデザインがなされ、現代的なハレの空間演出がなされていた。

表棟型会所飾り（ビル型）に分類される函谷鉾町はビルの中に会所があり、そこで会所飾りが行われる。鉾建てを開始した11日の様子を見てみると、外観はビルに入っているテナントの看板が目立ち、祭のための飾りは入口に注連縄と提灯が飾られている程度であった。14日には鉾と会所飾りが完成していた。会所と鉾をつなぐ渡り廊下には連日降り続いていた雨を避けるためのビニールがかぶせられていた。また、渡り廊下と会所の接続部にはスピーカーが取り付けられており、お囃子を一日中流し、祭の雰囲気高める役割を果たしていた。会所

はガラス張りになっているものの、ビルの2階部分にあるため、表から飾りを見ることはできない。中に入って会所飾りの様子を見てみると和室に会所飾りが行われていた。16日（宵山）になると提灯が一斉にともされ、この日はスピーカーではなく囃子方によるお囃子の演奏が行われていた。

同じく表棟型会所飾り（鉦・曳山型）に分類される小結棚町会所は昔ながらの町会所の姿を留めており、京都市指定有形文化財に指定されている。11日の時点では2階部分に裸電球と太鼓、1階部分に注連縄が飾られていた。13日には鉦が建てられている最中で、表から飾りが見えなかった。しかし、1階天井部分から渡り廊下が出され、会所と鉦をつないでいる様子が見られた。14日には鉦が完成し、会所入口に垂れ幕も掛けられていた。外に取り付けられている電球には傘飾りがされていた。宵山である16日には会所が開放され、誰でも見学ができるようになっていた。昔ながらの町家で、階段は一段一段が狭く、急な造りをしている。2階には御神体や供物が飾られていた。放下鉦でも囃子方によるお囃子の演奏が定期的に行われ、その時以外は鉦にも上がれるようになっている。しかし、放下鉦は建物やお飾り場の様子だけではなく、しきたりも古くからの伝統を守っているため、鉦の上は女人禁制となっている。土蔵についても同じで、いかなる場合も女性の立ち入りを禁止している。

奥棟型会所飾りの筍町の町会所は、普段そこに通ずる路地が閉鎖的で所在が分かりにくく、会所飾りが行われていない時には見つけることすらできなかった。しかし、会所飾りが行われると通りに面した入口が提灯や注連縄で飾られ、路地もハレの祭礼空間として一変していた。

表1 町会所の分類と観察結果

山鉦	所在地（町名）	分類・構造	外観	効果音	その他
菊水鉦	中京区室町通四条上ル菊水鉦町	表棟型（ビル型） 非木造 10 階建	・マンション 2 階から仮設階段 ・外には提灯と注連縄飾り ・表から会所飾りは見えず	・特になし ・宵山には御囃子の生演奏	・マンション内に町会所（2003 年～） ・マンションと町会所の入口は別
函谷鉦	下京区四条通烏丸西入函谷鉦町	表棟型（ビル型） 非木造 5 階建	・テナントの看板が目立つ ・提灯、注連縄飾りあり ・表から会所飾りは見えず	・スピーカーを設置、御囃子を流す ・宵山には御囃子の生演奏	・ビル 2 階に町会所 ・町家を踏襲した造り ・雨除けのビニール
放下鉦	中京区新町通四条上小結棚町	表棟型（鉦・曳山型） 木造 2 階建	・会所入口に幕 ・表から会所飾りは見えず	・特になし	・京都市有形指定文化財に指定（1983 年～） ・土蔵から鉦を繋ぐ廊下が渡されている ・昔ながらの造りのため階段が急
孟宗山	中京区烏丸通四条上る筍町	奥棟型 木造 2 階	・入口に提灯 ・通りから会所は見えず	・特になし	・会所入口から奥へ進んでいくとお飾り場が見える ・蔵は大きなガラス窓がつけられており、中にはタペストリー等が飾られている

（2）商店街での演出

調査対象の商店街では下げ方に多少の違いはみられたが、アーケードに提灯が飾られていた。また、河原町商店街と四条繁栄会商店街ではアーケードの縁に垂幕が掛けられ、祇園囃子がスピーカーから流されていた。また、7月13日には四条繁栄会商店街の店舗に関して装飾を行っている店舗はどのくらいあるのかを調査した。ここ

では1年中行われている物を除き、祇園祭の期間中のみに行われる装飾を数えた。祇園祭の装飾(ディスプレイ)を行っていたのは高島屋、永楽屋、四条センター、林万昌堂、藤井大丸、創作陶器たち吉本店、田中彌京人形の7店舗である。また、以上に述べた7店舗以外にも明らかではないが祇園祭らしい飾りをしている店舗があった。ただし、曖昧であったため今回は結果に加えなかった。

この中で最も興味深い変化を遂げた建物があつた。八坂神社御旅所の隣に位置する四条センターである。普段は京都土産を売る店舗としての機能を果たしている(図2)。それが祇園祭の時期になると行事に合わせて姿を変えるのだ。店舗内にある棚は全てキャスターが付いており、可動式となっている。ガラス戸も全て取り外しが可能なものである。祇園祭が始まり、宵山が近くなった13日には八坂神社の御旅所として姿を変える(図3)。左側では粽が売られ、右側では聖護院八ツ橋を販売されていた。提灯が飾られ、一気に祭の雰囲気高めるものとなり、人々が足を止めて見ている様子も見られた。山鉦巡行からの1週間は更に様子を変え、神輿が飾られる(図4)。神幸祭が終わり、氏子地域を回った神輿が御旅所にて七日七夜のお留まりをするためである。粽売りはセンターの一番端へ移動し、神輿と供物が飾られている。通りすがりの人々はこの様子に見入り、写真を撮っている人も多かった。山鉦巡行で一番の盛り上がりを見せた祇園祭だが、その後も祭が続いていることを表しているようだった。そして祇園祭の終了と共に元の土産屋へと姿を戻す。



図1 菊水鉦とマンション



図2 四条センター(普段の様子)



図3 四条センター(宵山までの様子)



図4 四条センター(山鉦巡行後の様子)

4. 考察

伝統的な町家と鉦では高さに差があり、鉦に上がる時には急な階段を上らねばならなかった。しかし、現代的な建物ではビルと鉦の高さが同じなので楽に上がることができ、安全性が高まったと言える。次に、人の流れを考えた構造や行事に合わせて変化できる構造の建物があつた。祭のことを考えて可動式の棚や取り外し可能な扉、

それらの収納スペース、ガラス張りのウインドーが兼ね備えられた構造で建築されていた。この工夫は、ケからハレへの転換が現代技術によって手軽になるよう意識的に行われている。また、スピーカーで音楽を流すことで祭本番でなくても祭の雰囲気が作り上げられていたし、ビニールの利用で雨風から鉾や懸装品を守る様子も見られた。そして、伝統が失われつつあるのではないかと考えていたが、内部の会所飾りには伝統的な会所でも現代的な会所でも差が見られなかった。外観については函谷鉾町会所のテナントの看板が祭の雰囲気を打ち消しているように受け取れた。しかし、この件については京都の市街地における建造物の近代化について議論が行われた際に問題になったことを受けて、比較的新しい会所はすべて外観も町家風に建て直すことで改善されてきている。外観に関しても、古来より残っている建造物はより良い状態で保存できるように、また新しく建て直すものは町家を再現した建物になるようにされている。以上の調査から現代技術はハレへの転換の簡易化、雰囲気や安全性の向上、文化物の保護、伝統の再現に大きく貢献していることがわかった。現代的な技術を生かして、伝統的な祭の空間演出が受け継がれているのである。

Ⅲ. ハレの空間演出に関する意識調査

1. 調査目的

ハレの空間演出は代々、家庭で祭礼時ごとに空間演出を行うことで受け継がれてきたと考えられる。しかし、現代では生活様式が変化したため、家庭での継承が難しくなってきたのではないだろうか。そこで家庭に次ぐ伝統継承の場として学校が考えられる。例えば、幼稚園で節分の日に鬼の面を作り、豆まきをした。教員が教室内の壁面を装飾する様子は小学校でもよく見られる。このように各学校での行事に合わせた空間演出は以前から行われてきた。このような学校や家庭での空間演出の実践は次世代の空間演出に対する意欲を高め、意識を継承する効果があるかについて検証することを調査目的とした。

2. 調査概要

調査期間は2010年10月25日～11月30日とし、京都教育大学学生と大学院生を対象とした記述式アンケート調査を行った。回収方法は講義時間内に配布、記入、回収を行う集合調査法と配布のみ授業時間内で行い、後日回収ボックスに提出してもらう方法を組み合わせて行った。アンケートは3つの設問に分けて構成されており、設問1は回答者の基本情報、設問2は祇園祭に関する経験、設問3はハレの空間演出に関する経験と意欲について問う内容となっている。アンケート配布数は386部、うち有効回答数は358部、よって回収率は92.7%となった。回答者の性別、学年、居住形態の内訳は図5～7に示す。

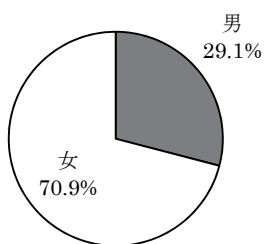


図6 回答者の性別内訳

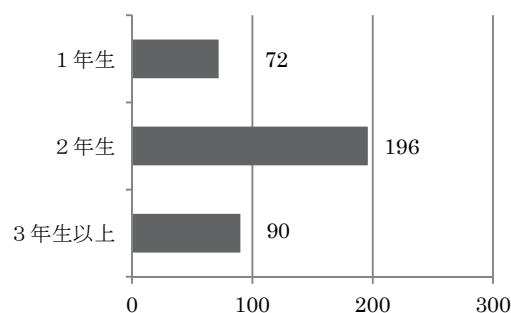


図5 回答者の学年内訳 (単位: 人)

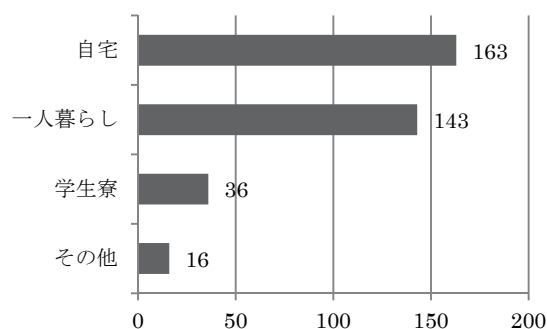


図7 回答者の居住形態内訳 (単位: 人)

3. 調査結果

(1) 祇園祭に関する経験について

過去に一度でも祇園祭に行ったことがある人は212人、行ったことがない人は144人、あとの2名は忘れたという回答だった。祇園祭に行ったことがある212人の中で2010年の祇園祭に行った人は半数以上を占めていた。また、7月の約1ヶ月間にかけて行われる祇園祭だが、この期間に祇園祭が行われている地区に訪れたかを複数回答で尋ねた結果、表2のような結果になった。更にこの地区に訪れた人に商店街の装飾や演出に気付いたかを複数回答可で尋ねたところ図8のような結果が得られた。気付いた人の感想は2つのパターンに分かれた。1つ目は京都ないしは京都近辺に住んでおり、祇園祭に参加したことがある人の「今年もこの季節がやってきた」「夏がやってきたのだな」「もうすぐ祇園祭があるのだな」というものである。2つ目は大学進学とともに京都に来た人たちが「もうすぐ祭があるのかな」「京都らしい」「観光地らしい」というものであった。前者は祇園祭が夏の風物詩となっており、祇園祭に親しみをもつ人々にとってはこれらの装飾が祇園祭の訪れとともに夏の訪れを示すものだということが分かる。後者は祇園祭に親しみがなくても祭が行われることを感じている。どちらにしても夏の訪れや祭りが近いことを感じ取っている。以上のことから装飾や空間演出によって人々は地域の祭礼が行われることや、季節の訪れを感じ取っていることがわかる。

表2 7月の祇園祭開催地区訪問者数

訪問地区	単位(人)
四条河原町-四条烏丸間	213
四条河原町-三条河原町間	264
寺町商店街	160
新京極商店街	189
錦市場	36
訪問はしていない	64

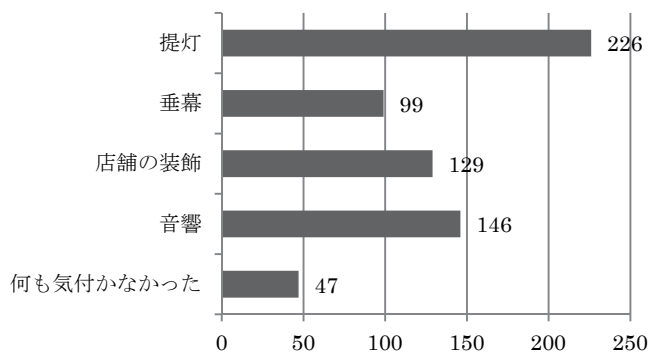


図8 装飾への気づき (単位: 人)

(2) 季節の行事について

次に1年間の行事について、各家庭でどのようなことを行ってきたかを複数回答可で尋ねた。その結果を図9～14に示す。対象とした行事は出身地の祭、正月、節分、桃の節句、端午の節句、七夕の6つである。まずは出身地の祭について図9のような結果が得られた。出身地の祭でははっぴや浴衣を着るという衣服に関する習慣が一番多かった。次に酒を飲む、餅を食べるといった食の項目が続いている。それに比べ住居空間を何かしらで飾るという習慣は比較的低い数値となった。同様に正月や節分でも食に関する習慣が上位を占めるという結果が得られた。しかし、桃の節句では食の項目よりも雛人形を飾る人が多く、端午の節句でも柏餅を食べることとこいのぼりを飾ることについてほぼ同じ人数の人が実践しているという結果が得られた。七夕では笹の葉に短冊などを飾ることが一番多いという結果が得られた。行事によって差があるが、すべての行事の上位は行事食を食べることが占めている。また、こ

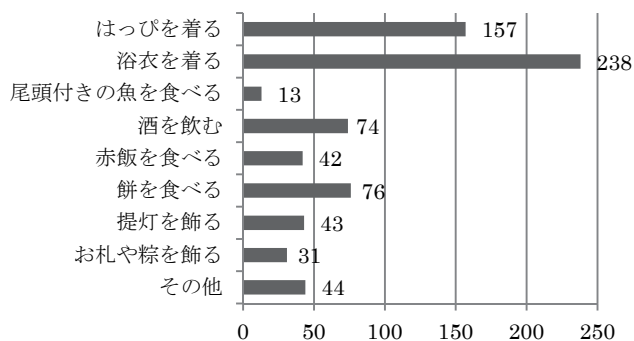


図9 出身地の祭での習慣 (単位: 人)

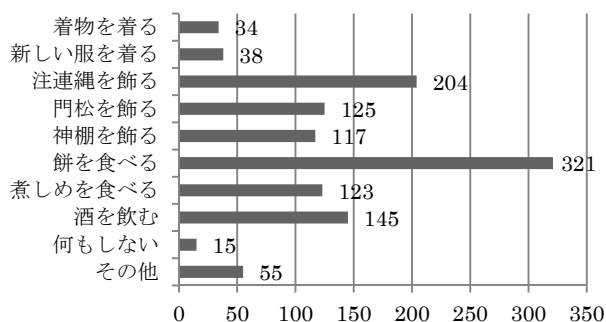


図10 正月での習慣 (単位: 人)

ここで現代ならではの結果が得られた項目がある。七夕にはイルミネーションで家を飾っているという回答である。近年、手軽に自宅でイルミネーション装飾が行えるようになった結果だと考えられる。

各行事で住居に関する演出に注目して見てみると、数値が高いものは手軽に手に入れられるものが多い。正月の注連縄や門松、桃の節句の雛人形、端午の節句のこいのぼりや鎧兜は市販されており、雛人形や鎧兜については子どもが生まれると祖父母等親戚から贈られるケースも多いだろう。また、現在はこれらのミニチュアも安価で手に入り、飾るためのスペースをそれほど必要としない。七夕のイルミネーションが新たな飾り付けとして出てきたのも、手に入りやすく実践しやすいからと考えられる。以上のように住居に関する飾り付けは入手しやすく手軽に行えるものが好まれる傾向にあるといえる。

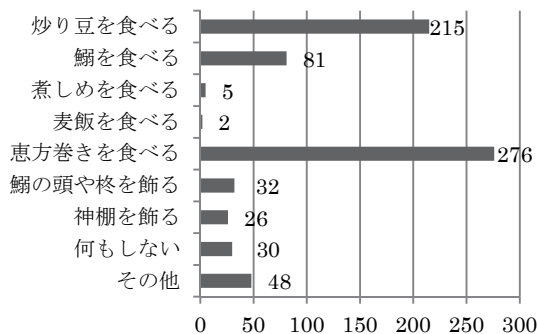


図 11 節分での習慣 (単位: 人)

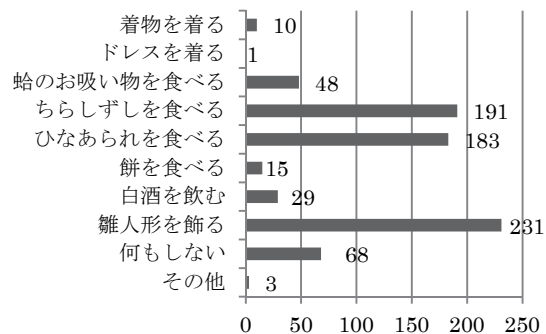


図 12 桃の節句での習慣 (単位: 人)

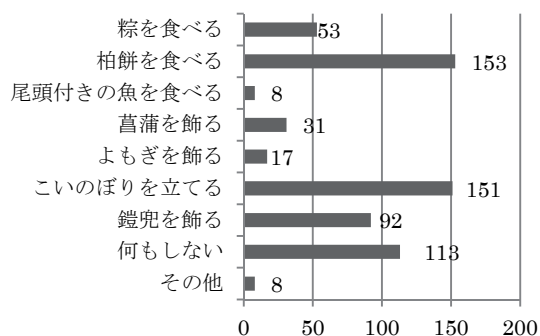


図 13 端午の節句での習慣 (単位: 人)

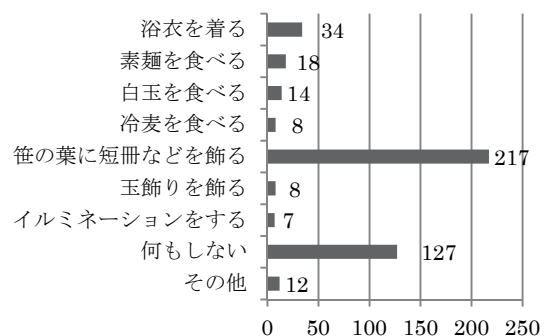


図 14 七夕での習慣 (単位: 人)

(3) ハレの空間演出に対する意欲について

図 15 と 16 は家庭でのハレの空間演出に関する意欲について示したものである。まずはアンケート回答者の性別・学年と意識の関係について集計した。この結果によると男性に比べて女性の方が意識が高く、また学年によっても意識の差が表れることが分かった。t 検定の結果、男女間には有意差がみられた ($p < 0.001$)。また、上回生 (3 回生以上) と下回生 (1~2 回生) の間は、下回生よりも上回生の方が積極的にしたいという回答が多くなっているが、有意な差はあらわれなかった ($0.05 < p < 0.10$)。したがって、家庭でのハレの空間演出に関する意識の差は性別の差が大きいといえる。

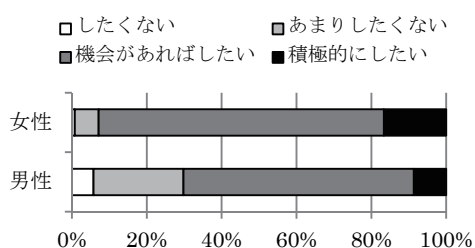


図 15 性別と家庭での空間演出意欲

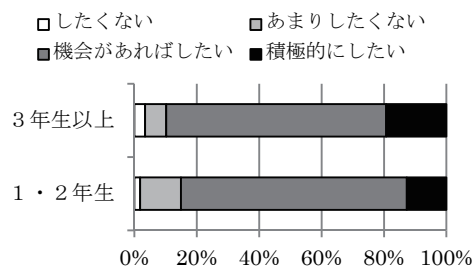


図 16 学年と家庭での空間演出意欲

図17と18は学校園でのハレの空間演出について必要だと感じるかを尋ねた結果である。家庭での空間演出と同様に男性よりも女性の方が必要だとする回答が有意に高かった ($p<0.001$)。また、家庭での空間演出への意欲では学年による有意差は現れなかったが、学校園での空間演出については下回生よりも上回生の方が必要だと感じている割合が有意に高かった ($p<0.001$)。これは、家庭と学校園とで空間演出に対する考えが異なるとも考えられるが、むしろ家庭での空間演出では「しようと思うか」と問い、学校園での空間演出では「必要だと感じるか」を問うたので、その違いによるものだと考えられる。同様に「教師になったらクラスでの空間演出をしようと思うか」の回答では女性の意欲の方が有意に高く ($p<0.01$)、学年による有意な差は見られなかった ($0.05< p<0.10$)。

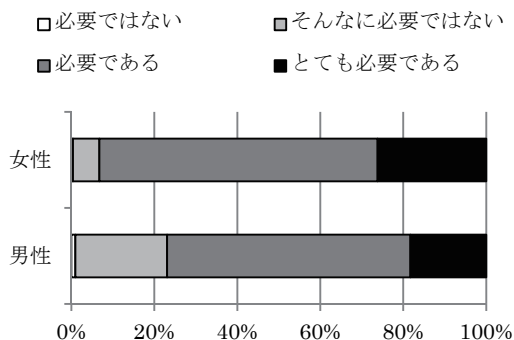


図17 性別と学校園での空間演出意欲

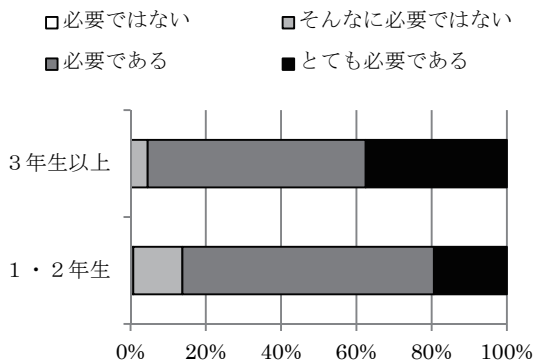


図18 学年と学校園での空間演出意欲

次は回答者の行事経験と家での空間演出意識の関係について図19に示す。回答者が各行事で行う習慣の数の平均値を意欲の度合いごとに出した。どの行事においても「したくない」と回答した者は正月以外の行事では1個以下であり、行事での特別なことはほとんど何も行っていないことがわかった。「したくない」と回答した者の正月の平均習慣個数は1.3個であったが、この場合は「餅料理を食べる」ことのみを行っていた回答者が多く、家での飾りつけ（門松、注連縄等）は全くされていなかった。「積極的にしたい」という回答者はどの行事においても実施している数が一番多くなっている。ハレの行事経験が豊富な人ほどハレの演出をすることに関して積極的であることが伺える。同様に経験数と装飾の気付きに関しても集計を行ったところ、ハレの行事経験が豊富な人ほど祭礼時の街中の装飾によく気付いているという結果が得られた。

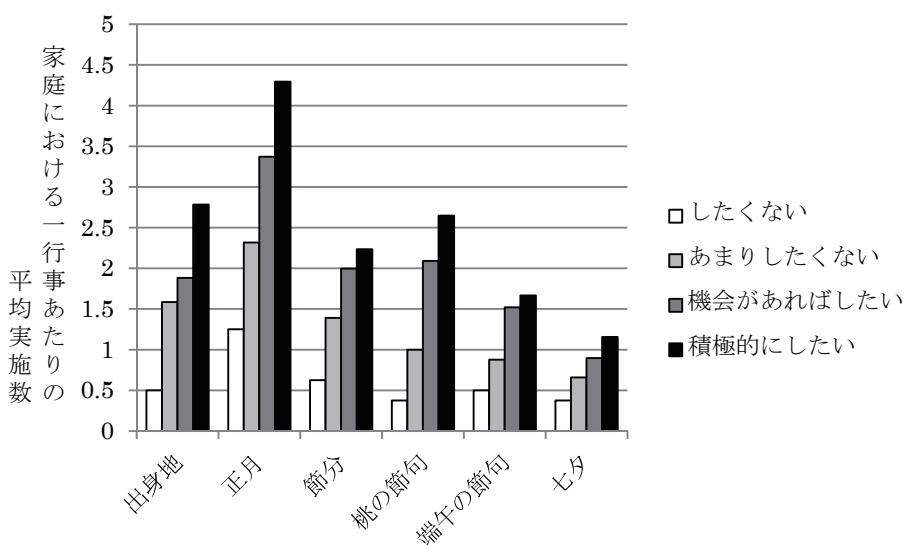


図19 家庭での空間演出意欲と経験の関係

最後に一人あたりの学校での経験数と意欲の関係について集計を行った（図 20）。保育園・幼稚園から高等学校の 4 校種中、何校種で季節の行事等における空間演出の制作を経験したかを尋ねた。結果を見てみると、季節の行事等において装飾物を制作したという経験校種数が少ないとハレの空間演出への意欲が低くなっている。1 校種のみ回答者のほとんどは保育園・幼稚園あるいは小学校でしか経験がなかった。経験した校種数が 2 校種以上だと意欲が高いといえる。そのほとんどが保育園・幼稚園から小学校にかけて装飾物の制作を行っていたと回答している。次に各学校園に通っていた時に、行事にあわせた飾り付けをしていたかどうかを尋ね、ハレの空間演出への意欲との関係を調べた（図 21）。学校園で作ったものを「学校園で飾った」経験や「家に持ち帰り飾った」経験がある人ほど、意欲が高くなっていた。t 検定の結果、学校園で飾った経験の有無による差が有意であり（ $p<0.05$ ）、さらに家で飾った経験の有無による差が大きいことがわかった（ $p<0.001$ ）。

以上の事から学校での経験がハレの空間演出への意欲に影響していること、さらに学校と家庭が連携した実践がなされるとその効果が大きいことがわかった。

4. 考察

現代の若者を対象としたアンケート調査を分析した結果から次の 2 つのことが明らかとなった。1 つ目は現代のハレの空間演出についてである。現代の家庭で行われているハレの演出では食分野が一番多かった。これは準備が手軽で、生活に一番取り入れやすいからだと考えられる。次いで多かったものが住居での演出である。しかし、各家庭でのハレの演出は食分野の演出に比べて住分野はかなり少ないという結果が得られた。また、幕、神棚、提灯と複数の飾り付けを行っている家庭とまったくしていない家庭とに二分化されていた。これは幕や提灯が代々その家や町内で行われている伝統的な演出で、家庭に使用できる状態で保存されている、もしくは町内からの呼びかけ・配布があるという場合に行われていると考えられる。それ以外では市販されており、準備・後片付け・保存が簡易にできる物が好まれているようだ。つまり、ハレの空間演出は食事での演出より少ないが、極端に少なくはなく、現在も受け継がれているとわかった。そしてその背景には装飾物の簡易化や地域からの支援が必要だと言える。

2 つ目は過去の経験と意欲の関係である。ハレの空間演出に関して家庭や学校での経験が豊富な人ほど空間演出に意欲的だということがわかった。また、周囲の演出にもよく気付く傾向にあった。これらの結果から幼い頃から家庭もしくは学校園でハレの空間演出を経験している人は身の回りの演出に気付きやすく、それらを行う事にも積極的であると言え、成人するまでの経験が豊富な人ほど空間演出への関心が高くなることがわかった。更に 2 校種以上でハレの空間演出を経験するとさらに意欲が高くなっていた。つまり保育園・幼稚園だけ、小学校だけ、ではなく校種を超えて継続的に空間演出を行う事が重要だと言える。この結果から、家庭と連携し学校で

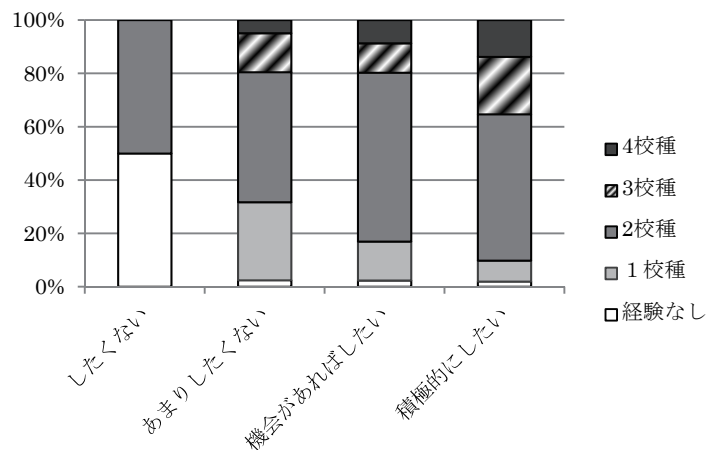


図 20 学校での空間演出の制作経験と意欲

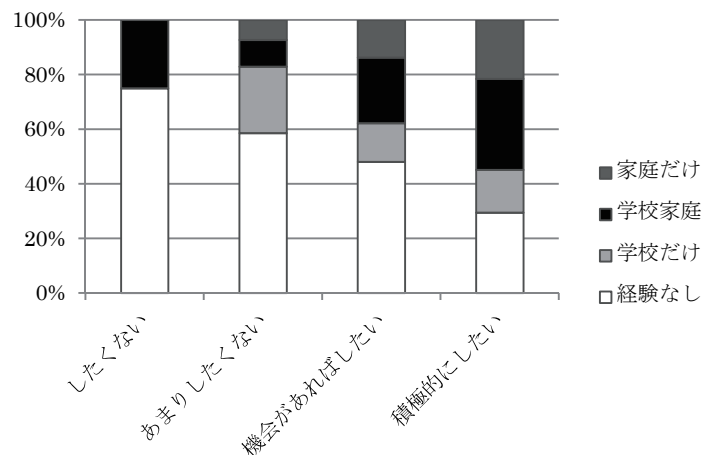


図 21 学校での空間演出制作物の飾り付け経験と意欲

継続的にハレの空間演出の取組みを行う事で伝統的なハレの概念を伝承する効果があると期待できる。

IV. おわりに

この調査では祇園祭における空間演出の実態調査と若者の意識調査を軸として現代におけるハレの空間演出について考察を行った。祇園祭での伝統的なハレの空間演出は高度経済成長の後、京都市街地の建造物が急激に近代化したことを受けて減少の一途を辿ることになった。しかし、1990年代頃から様々な方面での努力により伝統的な演出が復活し始めた。その結果、現在は一般家庭で行われる屏風祭のような演出は減少するも、会所飾りにおいては現代の建築技術を利用して伝統的な会所を再現している町内が多かった。商店街では音響やショーウィンドウを使った演出、行事ごとに建物の構造を変化させる演出もあった。伝統的な空間演出は形は変化しつつも維持されており、維持するために現代的な技術が生かされている。

京都教育大学の学生・院生を対象としたアンケート調査からはハレの空間演出に関する意欲について考察を行った。この結果から家庭や学校でのハレの空間演出に関する経験が豊富な人ほど、演出に関心が高く、演出を行う事に積極的である傾向にあった。つまり学校でハレの空間演出を行う事がこの伝統的な概念を継承することに繋がると期待できる。また、回答者が過去に行った学校での装飾には折り紙や画用紙で簡単に制作できるものが多く、実際に学校で行うとしたら手軽に作れるもので実践をしたいという回答も多く得られた。家庭での演出と同様、手軽なものが好まれる傾向にあると言える。

平成23年度から小学校では新学習指導要領が全面実施された。新学習指導要領改訂のポイントには自国の伝統文化に関する教育の充実が含まれている⁴⁾。これまでの学習指導要領は戦後の大きな課題であった「諸外国といかにつきあうか」ということが強く反映され、他国の文化を理解することが強調される傾向にあった。しかし、高度経済成長後の急激な欧米化を受けて自国の文化を重んじる内容になってきた。教育基本法にもこのような内容が加筆され、教育基本法改正に関する答弁⁵⁾でも「各地域の伝統行事」が例に挙げられていた。学校現場でハレの空間演出を取り入れることにに対して積極的な流れになっている。

実際に京都市内の小中学校では祭の時期に地域に参加して祭礼時の文化について学ぶ実践が行われている。具体的には浴衣での登校や祇園祭の時に学校オリジナルの鉾をつくるなどである。主に総合学習の時間で行われているようだ。また、他にも伝統的な祭だけではなくハロウィンの日に給食室を装飾する学校もあった。これらのことから総合学習や学級活動、道徳、委員会活動などの時間を利用して家庭・地域と共に活動することが望ましいということが言えるだろう。しかも、本研究から保育園・幼稚園、小学校、中学校、高等学校と継続して取り入れることが効果的であることがわかった。現在、幼少連携や公立一貫校等の校種間連携が進んでいるので、このような文化継承に関する取り組みも継続して行えるのではないだろうか。今後ますます家庭と学校・地域との連携が重要となると予想される中で、学校は地域性や子どもの発達段階を考慮したハレの行事の教育活動を取り入れることで、より文化継承に効果的な役割を果たすだろう。

最後になりましたが、本研究を行うにあたり祇園祭での実地調査にご協力いただきました各山鉾町保存会の皆様、アンケート調査にご協力いただきました京都教育大学の先生方、学生・院生の皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 岩間香, 西岡陽子編 (2008)『祭りのしつらい 町家とまち並み』, 思文閣出版, 66
- 2) 岩間香, 西岡陽子編 (2008)『祭りのしつらい 町家とまち並み』, 思文閣出版, 80-95
- 3) 谷直樹, 増井正哉編 (1994)『まち祇園祭すまい 都市祭礼の現代』, 思文閣出版, 81-98
- 4) 文部科学省 (2008)『小学校学習指導要領解説』, 東洋館出版
- 5) 文部科学省 (2006)『教育基本法改正に関する国会審議における主な答弁』,
(http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/discussion/07011611.pdf)